

迎ん力を成ト玉ひとより以來。四十八願ねもころに。我迷ひ子やあ  
ると呼び玉へども。いづこにもこそこゝにありと酬ゆる聲もなかり  
つる程に。こひとのほせ玉ふ御心。さぞやる方なく思召けん。然る  
に我等は今父の名を呼びたちぬ。南無阿彌陀佛の聲さこしめしぬる  
喜び。又おきどころなく思召けん。此御化導を聴聞致しましては  
永い間の御苦勞をかけ久しく御きもを痛め申した事の淺間とや  
とあやまりく。及ぶ限りの御報謝を申上げ。御心のやすまるやふ  
心掛けらるゝが何より肝要。

第三十五席

兎角世の中の人。佛法と云ふと何か心淋しうなる様に思ふたり。  
壽命の短くなる事の様に。縁起の悪い事の様に思ふ者が澤山ありま  
す。實に氣の毒千萬の事でありませう。佛法と云ふものは。左様な氣

の弱わるものでもなく。壽命の縮まるものでもなく。中々膽は大く  
なるし。義理は明らかになるし。忍耐力も勉強心も。出来てくるの  
が信心の徳であります。彼の六方體經杯の御趣意を。伺ふて見ると  
云ふと子たる者の心得の下には。朝は早く起よ。下女下男には其日  
くの仕事を。親切に命せよ。父母に心配苦勞をさせてはならんぞ  
親の恩を忘れてはいかんぞと。御懇に御戒めあらせられ。親の心得  
を説かせられては。子供を誘ふて善心にもとづかせよ。讀書算盤の  
如き技藝を教へよ。財産は其子に與へねばならんぞ。年頃になれば  
嫁を取てやれよ。それから師匠たる者の心得をも。弟子たるものゝ  
心得をも。御述べあらせられ。又妻たる者は夫の外にあるときは。  
何時歸られても飲食に困らぬ様。設ひ歸りが遅くなるとも。必ず起  
て出迎ひをせねばならぬぞ。夫の教誡は大切に守れよと。御示しあ

らせられ。夫たる者の心得には。先づ第一に出入必ず妻をねんごろにせよ。時々愉快の遊びをさせ。料理屋にも連れて往き。氣の慰む様にせよ。四季をりくは衣服も買ふてやれよ。小使をも與へてやれ。必ず浮氣をして女房に心配をかけるなど。御説きあそばし。其外召使者の心得。主人たる者の心得。何から何まで御化導あそばしてあります。世間の人が。悉く佛教に心を寄する様になりますれば。世は文明に進み。人心は善良になり。風俗は淳美になり。國家は富強になり。廉恥を重んじ平和を尊び。君子國の人民たる價直が世界に轟く様になる事でありませす。シテ見ますれば佛教と云ふ者は常に轉迷開悟の爲のみでない。今日くの日暮しにも必要なる事がわかりませす。然るに如何云ふものか。上等社會の人や下等社會の内には。中々信者が澤山御座います。却て中等社會に。佛教の信

者が少い者であります。成程上根上智の人は。死ぬると云ふ大切な事を。深く感トますから。所謂治に居て亂を忘れずの道理ですが。中等社會の人になりますと。今日の暮方には不自由はなし。肉體の快樂に沈りまして。格別遠慮と云ふ事もなく。世間の人からは尊敬せられ。花を眺め月を弄び。うかく暮す其内に。無常の風に誘はれては。七轉八倒の大騒ぎ。やれ藥師様。やれ金比羅様と。俄に神や佛に祈願祈誓をかけまして。生ある者は必ず死に歸し。盛なる者は終に衰ふる習ひで。致し方は御座いません。この處を御文章にあるべからず。されは死出の山路のすへ。三塗の大河をは我ひとりこそゆきなんすれ。哀れと云ふもなかくおろかなりと。御誠めあらせられて。千兩箱は富士の山ほど積み重ねても。冥途の土産には

なりはせぬ。可愛妻子がひとりでも。金錢財寶が一錢でも。持て行かれる未來ではありませんまい。弘法傳教の方々は云何です。世間の人が交際をして。呉れぬからとて。山に這入られたでもありませんまい。用いて呉れる人がないから。食に困つて木の根柢の實の御苦勞でもありませんまい。殊に釋尊の如きは。中天竺迦毘羅國の大王。淨飯王の最愛たる。たつた獨りの太子にまかせせば。今の世の中の豪商とか。紳士とか。イヤ大臣ぢやの次官ぢやのとは。地位も名望も幾倍すぐれ玉ひし御身なるに。阿輪陀羅姬の寐息を伺ひ。七寶莊嚴の宮中を夜抜して。樹下石上の境界とならせられ。苦行六年樂行六年。積功累徳の曉に。三界の獨尊たる釋迦牟尼如來とならせられた。此味ひが知られぬ故。僅な財産を鼻にかけ。火宅の中を面白そふに煩惱妄念の日暮しを。彼尊から御覽になりたら。どんなものでしよ

う。丁度垢の付ひた繻袴の。春縫の蔭にあつて。虱が妾ぐるいでもするか。雪隠の中で蛆虫が酒盛をして樂む様を思召でしやう。朝に生れ夕に死する蜉蝣と云ふ虫が。夕日の暖かなる處で。上を下へと飛騒ぐを體と云ひますが。あれは入日の陽氣に。情慾を催して此女は好き彼の男は嫌ひと。互に交せかやして上を下へと混雜し。其混雜最中に。一陣の風が吹き拂へば。乍ち死で一匹の影たにも殘らぬと申す事なるが佛の眼から御覽になりましたら。我等凡夫の有様は恰も蜉蝣の體つくと同ト事でしょう。實に恥かしい事では御座いませんか。左様して見れば。妻をも子をも振捨てる。佛道修行と出掛ねばなりません。道理は聞へても。譯はわかつても。智慧を磨き善根を積み。生死を離れ常住の證を得ると云ふ事は。惡逆の凡夫五障の女人。迎も及ぶ事ではありません。設ひ其功を重ね其徳を積ん

たどて。十信一万劫の年時を歴て。僅に不退の位を得ると説かせられてあれば。轉迷開悟は思ひもよらぬ事であります。然るに阿彌陀如來の本願は。法界の功德を六字の名號に縮め。三世の善根を刹那の念頭に與へまします故に。たのむに善惡の機をわらび玉はず。生るゝに別の行法もいらす。たのむ一念の信心一つで。摩尼寶珠のどほそに遊び。七寶樹林の花を詠め。耳には最勝の御法を聞き。身には無碍の神通を具し。命は無量壽。證は無上涅槃。大樂自在の仕合は。自力疑心をさしはさます。設ひ罪業は深重なりとも。必ず彌陀如來は救ひましますべしとある。善知識の御化導にうちもたれ。往生は一定御助は治定と。安心安堵の身にあると云ふ事を。御懇ろに御示しあらせられてあるが。今此領解文。

第三十六席

一 大事の後生とは。一は雙のない事。大は勝れた事。されば我等如き罪惡生死の徒者が。此度生死流轉の迷を離れて。淨土に往生を遂げ。無上涅槃の證を開く大切な事であるから。一大事と仰せられた高野の明遍僧都の御言葉に。たゞ一大事の生死を出づべきはかりごとを。平生よく思ひたゝすむべしと示され。法然聖人は行末もあやうからず。往生もたのもしき程に思召定めさせましますべく候詮トては人のはからい申すべき事にて候はず。よく案ト御覽候へ。此事にすぎたる御大事。何事か候べき。此世の名聞利養は申しならぶるも。なかゝいまゝ候と。御意あらせられてあります。然れば世間の上でも大事くと云ふ事が。色々ありて。家に附ての大事もあり。身に附ての大事もあります。併し大事くと云ひましても。高が夢の浮世よふても一旦わるふても一旦。好も不

好もすてゆくからは。誠の大事では御座いませんが。眞實まことの大事と云ふは。今度の後生で。是に過ぎたる大事はない。故に御文に聖人の御前に参らん人の中に於て。信心を獲得せしめたる人もあるべし。又不信心の輩もあるべし。以ての外の大事故なりとも。又一大事と云はこれなりとも。御示とあらせられてあります。醫者が病人の脈を伺ひ。腹を按て是は餘程根ざした病氣。至つて大事ぢやと云へども。病人が醫師の云ふ事を信せず。いくら六ヶ敷くいわれても。己が心に左程六ヶ敷とは思はぬと云ふて。肝腎の病人が大事がらねば。養生は出来ませぬ。今も其の如く善知識は飽まで今度の一大事と。御催促なされても。肝腎の御流を汲み奉らるゝ門徒同行が。身に引受て一大事と思はひでは。無宿善の機にて。力には及びませぬ。昔し唐土の扁鵲と云ふ人は。天下に雙のない名醫で齊の國

へ逗留の間。齊の君桓公は扁鵲が名醫なる事を聞及ばれ。丁寧に待遇はれ。度々御前へ出て脈を窺ひ。或時君の顔色を見て申しますに。君には御大病の萌が見えます。唯今は疾い皮膚の間に御座います。急に御療治仕らひでは。御病氣が重りますと云へは。桓公は食もすゝみ酒も味し。どこに惡ひ處もない故。扁鵲が云ふ事を聽入れ玉はず。而して其後五日程たち。復御前へ出で君の顔色を窺ふて唯今は君の病ひ血脈にあります。先日よりは餘程内々入りました。大事で御座いますから。急に薬を服し玉へ御療治仕りませふと。申しあげますと。其時桓公がいやく先頃も其やうに申せども。孤が心にさらく疾ひがあるとは思はれぬ。随分氣色も平生の通り。何も變る事はないに由て。薬を服む事は先づ見合せうとの事で。扁鵲是非なく歸りました。其後また五日過ぎて御前へ出で。御容體を伺

ひ申しますには。今日では君の御病氣腸胃の間へ入りました。餘程療治の手おくれが致しました。併し只今ひきしめて御養生あそばさるれば。御本復になりますと申しましても。桓公聊も驚きたまはず。大醫の目には其様に見へるか。食はすゝむ酒は飲める夜はよふ寐る。何處に一つ申分はないに依つて。療治には及ばぬと云ふて。少も取りあはれませぬ。扁鵲も力及ばす其日も空しく歸りました。其後兩三日を経て。また御前へ罷出て。君の顔色を伺ひ見ると。今度は何とも云はず。逃て出ました。桓公は不審に思召。人を驅て様子を探ねさせ玉へば。扁鵲が申しますには。拙者君に大病の催しある事を疾く存した故。たんく御療治仕らふと申せども。少しも聞入れ玉はず。今日の御容體を窺へは。疾ひ膏肓に入り最早御療治の手がつかたれば。何とも仕様がなさに遁て戻りたと申しました。果

して五六日すると。桓公遠にふるひつき給ひて。御氣色すぐれ玉はず。扁鵲が云ふたに違はぬ。急に扁鵲を召せと仰付られても。扁鵲は何時の間にか他國へ去つて仕舞ひました。其れから庸醫共が寄り集つて。種々の御看護致しました。遂に御療治も叶はずして。終られたと御座います。是がよき喻へで。善知識が吾等に對して。一大事の後生ぢや。以の外の大事ぢやと。毎日の御化導。然るに後生と云へは遠ひ事に思ひ。先づそれよりは。此世の事が大事と。今日くれ明日くれ油断する間に。無常切斷の時季がまきたなら。臍を噛みても取返しはありませぬ一世の中の人の命と蠟燭は。火の消ぬ間に信を取るべし。何時しれぬ露の命。片時も油断はならぬ程に。急ぎいそきて信心決定が肝要。

第三十七席

一大事と云ふ事に就て面白ひ話があります。昔々華嚴の鳳潭と申す人がありましたを。京都の六角に有徳に暮す佛教信者の後家様が。鳳潭師が子供ながらも。志は堅固に才能はすぐれてあれど。云何せん貧生の悲しさには。思ふ様に勉強の出来ないと云ふ事を聞かれ。自身の内へ呼び寄せ。飲食衣服はおろかなこと。學資萬端悉く引受て世話を致されます。時に鳳潭師は毎日叡山に通學して。非常に勉強せられます。其節叡山の大僧正が。天台の四教儀と云ふ書物の講釋を初められました處一山の大衆は勿論。近郷近在の寺院方が我もくと。一時は千人計の聽衆で中々盛んにありました。然るは追々霜枯の時節となりますと。今日は三人明日は五人と云ふ様に。日々聽衆を減り節斯から正月にかけては。纔か三十人が四十人。それも段々少なくなりて。到頭しまひには鳳潭師一人になりました。乃で

和尚が言はしやるには。鳳潭房其方も知ての通り。昨年此四教儀の開講を致した時には。殆ど千人内外の大衆。前代末聞の繁昌であつたが。追々聽衆が減り今日は御前ひとりとなつた。云何にも御前には氣の毒であるが。講釋は今日限り止めますから。明日よりは御前さんも。登山はよこにさつしやれと申された。乃で鳳潭師が云はれるには。云何にも左様では御座いませうが。せめて此四教儀文は御通講を願はれますと。和尚がソーサせめて頭數の三十なり五十なりあれば兎も角も。御前ひとりを相手に。此講堂で講釋をしては世間へ對しても面目もない事だからと。斷はられますと。鳳潭師がそんなら頭數の三十と四十並べさへすりや。彼尊は講釋をして下されますか。ソーサ何も私が嫌やと云ふて止めるのではない。何でも頭數が並べば。勢もよい事だから。講釋致ませふ。左様で御座います

か。それでは明日は私が屹度頭敷を並べますから。何卒御講釋を願ひます。宜ひ承知しましたと。そこで鳳潭師は和尚に暇乞をし。急て内に歸られました。何を云ふても三里以上の山坂故。最早日の暮になりました。内に歸り座敷へも上らず。伯母さんアノ買物がありませんからとて。大風呂敷をかりて。直に伏見へ参りました。皆様も御存知の伏見には。伏見人形とて澤山賣ております。其人形を百計り買ふて歸られますと。後家様が鳳潭さんそれはなんぢやの。イヤ此は伯母さんに見せられなひもの。見せると伯母さんに叱られますから。みせませぬ。イヤみせませユレ何も此伯母に隠す事はいりません。どれみせなさい。いや見せぬと風呂敷包を兩人が争ふ内に。ころく〜と人形がころけ出ました。サ一後家様が怒り出した。御前さん此は伏見人形ぢやないか。子供の事なら人形の二つや三つ

を買ふたと云ふて。此伯母は叱りはしません。此程澤山な人形を御前さん云何する積り。そんな子とはさら〜思はず。賢ひものぢやゑらひものぢや。天晴な坊様になつて。衆生濟度の器量があるが可愛そふなは貧生ぢやと。聞て私が呼寄せて。御前を眞身の子と思ひ。立身出世を樂みに。心盡しの甲斐もなく。情けない事して呉れると。涙乍らに意見をせられ。鳳潭師の胸の中。明かそふか明かすまいか。いや〜燕雀何知ニ鴻鵠志一云ふてもほんまにはせられま。い。悲ひ事ぢやと涙ぐみ。伯母様何卒堪忍して。親でも子でもない者。此年月の御養育。何から何まで御世話になり。月に二度なり三度なり。子供心を憐んで。玩弄物がよければ玩弄物を買へ。御菓子が好きなら御菓子を買へと。云ふておくれた其金で。煎餅一枚密柑一つ。買ふた覺ののない私が。此澤山な伏見人形。求めて來たの



は能々な謂れ因縁のあると。思ふて堪忍して下されと。両手をついての断に。彼の後家さんも納得し。左様かほんに左様であらふ。御前さん程の發明な子が。よも徒らする爲の伏見人形ではあるまいから。もふ伯母さんは聞きませぬ。氣嫌なほして御飯をしまし。早く休んで早く起き。あの四教儀とか云ふ天台の大切な御講釋のすむ迄は。寒くとも辛抱して。ノウ鳳潭さん難有い御断を。此伯母に願ひますと。明れは早朝鳳潭師は相變らず。辨當と書物を首にかけ。脊に例の伏見人形。草鞋がけで雪の中を勇み進んで叡山へ登られ。講堂の眞中見臺の下に只獨り。風呂敷の中から人形を取出して。すらりと並べられた。大僧正は御老體の御身。杖にもたれて御出席になり。見臺の前になほらせられ。眼鏡をかけて御覽になれば。僧侶は鳳潭師只一人。ハテ頭數の三十や四十は必ず並べると云つたが。

誰も居らぬは如何トや知らんと。能くく御覽になると。見臺の回りに人形が澤山並べて御座います。又候和尚が大立腹。こりや鳳潭爰に並んであるのは伏見人形ぢやないか。伏見人形が物を云ふか。伏見人形が講釋を聞くか。此老僧をたはかるにも程がある。不届者と云ひ放て立たせらるゝ。法衣の袖に取付いて。もふ和尚さま御腹は立ちまじよふが。御堪忍遊ばしてどうか御講釋を願ひます。いやく講釋はせぬ。ごふあつてもと云はるれば。鳳潭師は涙ながら和尚様をふ仰せらるれば申上ます。昨日彼尊は三十五の頭數さへあれば。講釋してやると仰せられた故。ごふか講釋が聞きたいものぢや。三十五の頭數が並べたいものぢやと。所々方々を驅回り。一山の大衆を勧誘致しましても。誰一人賛成して呉れる者は御座いません。餘りく残念で。つくく思ひ回して見れば。何かにも昨

年開講の當時。千人内外の聴衆がありました。彼尊の御眼から御覽になれは。立派な坊主と見へましても。此鳳潭が目から見れば。伏見人形も同ト事。世間の手前仲間のつきあい。名聞人並の風情にて。我身の出離に驚くでもなく。門徒の後生を案づるでもなく。仕様ことなしの出席であります。私一人は初から。雨が降らふが雪が降らふが。只の一日でも缺席致した事は御座いません。此人形に付ましては。夕は内の伯母に叱られ。今亦和尚に勿付られ。御講釋が願はれいでは。今迄學んだ天台も中途で水の泡となり。伯母の家に歸られず。今生後生の路頭に迷ふ。此鳳潭の身の上を。不愍と思召さるゝなら。御許しなまつて下されと。理を盡しての物語りを。聞て和尚は兩手を拍ち。さてく梅檀は二葉より香し。才智勝れた其許と。其初より老僧の眼には着ひたが。古の智者高僧に勝りはし

ても。劣らぬ器量と知らなれた。此れから其許一人へ此老僧の學問は。残らず授けて進せるとて。毎日休みなしの御講釋。遂に天台の奥義を授かり。後に華嚴の學問をして。華嚴宗と云ふ一宗を中興し天下有名の大徳となられました。是が則ち鳳潭師十五の年の物語り何と同行衆云何であります。餘所の事ではありませんぞ。折角御寺に參られても。人並名聞の風情では。伏見人形も同ト事。後生を大事に思ひ。佛法を尊く思ふ心なくては。千座萬座と座を重ねても。名聞人並徒ら事。我身の大事と驚きの。念慮を起して聽聞すれば。一座の御化導で立ち處に。他力攝生の旨趣を受得し。飽まで凡夫直入の眞信を決定しましくけりと。御開山の御領解も御互の信心も佛智回向の賜なる故。智慧才覺がたよりにならず。愚痴瞋味が邪魔にもならず。たのむ歸命の一念に。往生の大事が片付とある。頓

極頓速。圓融圓滿。絶對不二の御教が。今此浄土眞宗の御法義。

第三十八席

上は大聖世尊より初めて。下は惡逆の提婆に至る迄。遁れがたきは無常なり。貴賤上下の隔てなく。何時も知れぬが露の命トや。皆様方御承知の通り。一天萬乘の御母君と仰がれ玉ふ。英照皇太后陛下に於かせられても。本年一月八日の頃より。御不例に渡らせられ。初の間はかりそめの御事ならんと思ひ奉りしに。御惱みは日々重らせ玉ひ。諸々の御療治も御効あらせられず。十一日の午後六時を以て。六十有五の寶算を棄てさせられ。上兩陛下を始め奉り。高貴の御方々の御歎きは申に及ばず。下萬民俄に天津日の光を失ひて。常暗の長夜をたざる心地して。四海八音を遏密し。謹て奉弔致しませし九事でありませす。我が御本山に於かせられては。乍恐皇太后陛下の

御生家たる九條家とは。宗祖見眞大師の御時より。淺からざる御關係が御座いまして。昔大師が眞俗二諦肉食妻帯の御宗旨を。御開きあそばすにつぎ。大師と御結婚あらせられ。御裏方と御成あそばされたは。即ち九條關白兼實公の姫君玉日の宮様で。現今新御門跡様の御裏方籌姫様も。同トく九條家の姫君で。皇太后様の御姪に當らせられます。夫故皇太后様が御重症と御聞になりませして。早速大御門跡様が。籌子様御同道にて御東上あらせられ。直に青山御所へ御参内ありて。御見舞御申上になりませしたは殆ど十一日午後四時頃でモウ御崩御御間近にならせられて居た御様子で。籌姫様御参内の趣きを。聞思させられ。大に御喜あらせられ。モウ薄暗い時分にて。奉仕の女官が差出す手燭の火にて。籌子様の御顔をつくく御覽あらせられ。大そふ大きくなつて範君よりも大きひと仰せられたが。

最後の御言葉で。それより問もなく崩御あらせられたと承ります。が  
 (範君様と申上奉は山階の宮様の御息所とならせられてある御方の  
 事にて。即ち籌姫様の御姉姫様の事でもあります) 若し加持や祈禱で  
 命が延るものならば。やん事なき雲の上なる御方の事故日本國中の  
 神官僧侶禰宣山伏を。幾千人でも幾萬人でも御集めに相成。そんな  
 立派な御修法でも行はせらるゝで御座いませう。醫者や薬で命が  
 延るものならば。世界屈指の大醫方が。古今無類の妙薬で御療治申  
 上られた事で。そんな御重症でも。忽ち御全快あそばさるるに違は  
 ありません。然るに大醫の配劑も其効なく。加持や祈禱の力も届か  
 ず。空しく崩御あらせられたを窺ひ奉れば。宿世の約束事と云ふも  
 のは。今日の人力にては何共致し方のないものと云ふ事をよくよく  
 承知致さねばなりません。且又思出しまいらするも涙の種でありませ

すが。御承知の通り。本年一月三十日は。京都に於かせられ。孝明  
 天皇様の三十年の御祭典を御行ひあそばさるゝに付。皇太后様も同  
 月中旬青山御所を御發輦にて。京都へ行啓と御内定あそばせられた  
 事でありました。その御祭典に先たち同月の十一日に。崩御被爲  
 遊。行啓の爲に御新調あらせられたる御輦が。御靈柩と化りて。御  
 遺骸を乗せ奉るを拜み奉るに付ましては。日本國中の神や佛が。よ  
 つてかゝつて御守あらせらるゝ。皇太后様の御身の上でさへ。無常  
 の風に容赦はない。御待受の御祭にも御逢ひ遊されずして。崩御遊  
 はされたもの。生れ初めしよりして。定まれる定業は延ばす事も出  
 来ねば。促める事も出来ない。何時とも知れぬ露の命と合點がいつ  
 たであらふぞなら。雜行自力をふりすて。一心に彌陀をたのみ奉  
 り。出てゆく後生の一大事は。大悲の親様に任せ奉り。稱名相續が

何より肝要。

第三十九席

申も畏き事ながら。皇太后様には坤徳いと大に。母儀いと高く。深く下々を惠ませ玉ひしこと。御質素にまじませし事ども。御坤徳のかずくを。一々數へ奉れば數も限もなき事なるが。其中で一つ即ち佛法御歸依の御事績を御話に及びます。陛下は御宿縁や深かりけん。御幼少の砌りよりふかく御心を佛法に寄せさせられたまひて。御年未だ十歳に滿たさせたまはざる頃ろ。御父尙忠公東福寺御參詣の砌り。陛下を御伴なひになり。歸路清水寺に御參詣ありしとき。四方の眺めの麗はしく。都大路にゆきこふ人のさまものさかに音羽の山地主の櫻。さては白絲の三筋の瀧も御心に叶ひけん。御歸殿の後ち。豫て學ばせ玉へる丹青美事に。清水寺の風景を描き玉ふに。

御筆力と云ひ御趣向と云ひ。彼の「松風や音羽の瀧の清水を。結ぶ心は涼しかるらん」と云ふ觀音の御詠歌の意に似通ひければ。父君は之を表装して額となし。清水寺に奉納し玉ふ。其後陛下御入内なりし節。當時同寺の住職たりし月照和尚は。深く之を名譽の事となし。内陣の上部に奉掲し。謹て觀音に陛下の萬歳を御祈願申上られました。又京都深草村の西岸寺は。九條關白忠通公の御創立にて。初めは法性寺小御堂と申しましたが。御本尊は聖德太子御父。用明天皇百ヶ日御追福の爲めに一刀三禮の御作阿彌陀如來で御座いまして。後白河法皇屢々行幸あらせられて。御製に「憂き波を越へて嬉しき西の岸。誓の船に乗りて渡らん」とありしより。西岸寺と改稱したと申す事ぞ。陛下御幼少の砌。御父君に伴はれ。兩三度同寺に成せられ。大戸張打敷共に桃色綴子に。親ら下り藤の縫紋を遊ばし

同寺へ御寄附になりました。扱又本年は先帝の三十年御忌に當らせ玉ふを以て。陛下は青山御所に於て。御躬親ら先帝の御冥福を祈らせ玉ふ爲に。紺紙金泥に般若心經を御染筆遊せられ。金泥の紺紙に粘着するに御心を勞し玉ひつゝ。立派に寫し終らせられたと承ります。此心經は本年行啓の時親しく。御納經遊はさるゝ思召にてまじませらるゝ。今や三十年祭に先立て。崩御あらせられとは。御遺憾の御事にやあらんと。御付の女官は悲歎の涙に咽はれけるとかや。斯の如く深く佛法を御信仰あらせられた事故。御大喪に付まじりて。天皇陛下に於かせられては。或は減刑令を御發布に相成。日本國中の罪人一般の刑期を減縮あらせられ。或は四拾萬圓を御下賜に相成り鰥寡孤獨を御救恤あらせられ。或は御料地の殺生を禁斷あらせられ九事杯。大凡此等の事は皆是れ大慈大悲の御仕事故。取も直さず生

きた佛法と申すもので。御慈悲深くまじませし。皇太后様は。あの世より御覽あらせられて。嘸々御満足遊はさるゝ事でありまじよう誠に天皇陛下の御孝心の程。恐れ入りたる次第なりと。申すも畏き事を御座います。

第四十席

日本國中の神や佛が。よつてかゝつて御守りあらせらるゝ。皇太后様の御身の上でさへ。無常の風は遁れさせ玉はず。一月十一日に崩御遊ばせられ。二月七日八日を以て。京都にて大葬の御儀を御執行あらせられ。七日の午後六時。大宮御所を御發柩ありて。泉山の御齊場へ遷させ玉ひ。いと嚴肅なる御式ありて。翌八日午前二時御齊場より。御陵に向はせ玉ひ御埋藏の御式全くだりとは。十一時三十分でありました。私も其時京都へ参りまじりて。本山執行所役員一同

と。鈍色の法衣を着し。夢の浮橋に於て。謹て奉送致しませしが。御靈柩の前後左右には。皇族華族文武百官。御列正しく進行せられ中にも御喪主威仁親王殿下には。鈍色の單衣に黒啄色の袴を召され上には同ト黒啄色の袍を召し。其肩には白布の素服を被かせ玉ひ。首には艶なしの冠を巻纒にして召され。黒色鈍色の扇に杖携へられ。藁沓をふませられ。徒歩にて進行し玉ひ。兩側に拜觀し奉る人。民は。恭敬靜肅を極めて。一語を發する者もなく。殊に夜中の事故天地は寂寥として。時々聞ゆる者は。只牛車の輾る響計りで。何人も胸塞り涙落さるものなると云ふ有様でありました。就きまして一つ御話申して置かねばならぬ事は。此頃世間に奇怪な事を言觸らす者が御座います。英照皇太后様の御葬儀は神葬であつた。シテ見れば皇室におかせられては。神道即ち神葬祭を御用ひ遊ばされた杯と

申す人が。此處彼處にナラホラある様に見ゆますが。是は實に淺薄至極なる愚論と申さねばなりません。何者眞正の神道は。皇祖天照皇大神宮を初め。八百萬の神々を御祭りあそばす御儀式にて。決して宗教では御座いません。夫れ故に儒佛神の三道並び行はれて相悖らず。我皇室におかせられては。古來儒佛神の三道を。偏頗なく御用ひになりてあります即ち治國平天下の爲には。儒教と云ふ學問を御用ひなされ。御先祖様を御祭あそばすには。神道と云ふ儀式を御用ひ遊ばされ。安心立命の爲には。佛教と云ふ宗教を御用ひ遊ばされてあります。其證據には彼の菅丞相の御奉公申上られました。宇多天皇様の如きは。治を六經に求め道を有識に問ふ。政治は支那傳來の學問。即ち儒教に依て行へよと仰せられましたが。左様なら神道は御嫌かと申せば。決して左様では御座いません。御自身の御姫

君即ち内親王様に。伊勢大廟の御守役を仰付させられて。此内親王様を齊宮と申奉ります。之が即ち御先祖様を御祭あそはすには。神道でなければならぬからであります。左様なら神道儒教の二で。佛敎は御嫌ひかと申せば。決して左様では御座いません。御自身が御剃髪あらせられ。三衣を御着用にて。念佛誦經あそはされまじたら。此天子様を又は寛平法王と申奉ります。斯の如く三道各役前が別でありますから。昔は争論も起りませんが。近世になりまして。僧侶が葬式を行ひまするを。神官が羨しくなつたと見ゆまして。神葬祭と云ふ事を初め。明治五六年敎部省設置の砌に。神道宗と云ふ一種の宗敎が出来たので。神葬たの佛葬たのと。餓鬼が死骸を争ふ如く喧ましくなつたのは。其時分からの事で。現に神官と神道宗敎導職とは。全く別物で官幣國幣と云ふ様な。位の高ひ神主は。決して

て葬儀に關係する事はならぬ筈。位の低ひ神主に急に止めると云ふたら困るのであるふから。當分従前の通りと云ふ事に。規則がきまつてあります。皇太后様の御葬儀は。神や洗米を御供になり。掛りの方々が烏帽子直垂を召して。居らしやつたから神道であるふ杯と考へるは。大なる間違ひであれば。決して神葬ではありませぬ。其證據は久我齊主にもせよ。鷹司齊官にもせよ。御葬儀に關係の御方々は。神官でも御座いませぬ。神道敎導職でも御座いませぬ。只公卿とか宮内省官吏とか云ふ様な。御方はかりであります。然らば神葬でないならば。何と申すものであるぞと尋ねて見ますれば。あれは國葬と申すもので。即ち日本帝國の國風に從ふて。御葬式をなされたのであります。皇太后様計では御座いませぬ國家の大功勞ある人は。臣下でも國葬を賜はる事が御座います。近くは昨年薨去になり



ました。毛利公爵も國葬でありました。國葬と云ふ事は。或は日本帝國古代の國風に從ひ。葬儀を行はせらるゝとか。又は日本政府の國庫より費用を支出して。葬儀を行はせらるゝとかの事を國葬と申すので。國葬が即ち神葬と云ふ事では御座いません。若し國葬が即ち神葬であるならば。他日國家に功勞ある人に。國葬を賜るに當りまして若其人が神道宗に反對の人であつたらば。云何ぞしよう。國葬は難有いが御免を蒙りたい杯と云ふ様な事が始まりましたらば。實に不都合千萬でありませんか。然るに國葬と神葬とは全く別物で佛教信者にてあられ。耶穌教信者にてあられ。云何なる人に國葬を賜りまして。決して左の如き不都合は御座いません。こふ云ふ譯であるから。皇太后様の御葬儀は決して神道宗の儀式では御座いません。宗教上の意味のあるものでは御座いません。皇太后様の御信

仰は。前席にも申述べました通り。徹頭徹尾佛教で御座いますから泉涌寺長老鼎龍曉師に。大宮御所に於て。御法會引導奉仕及び御埋棺まで。供奉仰付られ。靈明殿にて御中陰御法會御修行あらせられた事でありませす。又御歴代の例に依らせられ。御遺髪を紀州高野山金剛峯寺へ。奉取なされた事で御座います。全體佛教におさましては。安心立命が大切に御座います。死後の葬式などは。云何様な儀式でもよいので。御釋迦様が御説なされた經文は。悉皆活きた人間に對せられての御説教で。死人に對せられての御説法は。一度も御座いませんから。葬儀杯のことを。彼れ此れと申しまするは。卑見識では御座います。世間の人は兎角分らぬ事や。間違つた事を申しますから。何事も充分たゞとしまして。決して荒唐無稽の妄説に迷はされぬ様。充分注意し置なければなりません。

御助候へとたのみ申して候。御一代聞書に一聖人の御流はたのむ一念の所肝要なり。故にたのむと云ことをば。代々あそぼし置かれ候へども。委く何とたのめと云ことを知らざりき。然るに前々住上人の御代に御文を御作候て。雑行をすて、後生たすけたまへと。一心に彌陀をたのめと。明かに知らせられ候。然れば御再興の上人にてましますものなりと被仰て。御安心の趣きは代々相承の善知識。一器の水を一器に漏すが如く。たのめくと御勸あらせらるゝ事なれども。蓮如様の御時代に當りましては。十劫たのみや。普知識たのみ。或はゑせ法門とか。くせ法門とか。異義が區々になりまして。相承の正義をくらまじ。往生の大益を自障々他すると云ふ有様で御座いましたから。こりや情ない事トや。不愍な事トやと思召させら

れ。一仰に云く。佛法をばさしよせていへくと仰せられ候。法敬に對し仰せられ候。信心安心と云へば。愚痴の者は別の様に思ふなり。只凡夫の佛になる事を教ふべし。後生助け玉へと彌陀をたのめと云ふべし。何たる愚痴の衆生なりとも。聞て信を取るべし。當流には是より外の法門はなきなりと仰せられ候。信心と云ふも安心と云ふも別の事ではありません。彌陀をたのむ事でありませ。何とたのむ事かと云へば。後生助けたまへとたのむ事トやと。御親切なる御教化。之が即ち中興の中興たる所以で御座います。今生の事をたのむのでないから。後生と云ふてあります。後生と云ふても人間天上に生るゝ事なら。皆迷ひで。苦をたすかるのでは御座いません。三惡の苦は勿論人間天上の苦までも皆解脱して。無上の佛果を得るを助かると云ふのであります。苦惱の衆生を助け玉ふは。阿彌陀如

來御一佛と疑ひなく慮りなく。深く信する心が他力の信心なれば。其心は後生の一大事を佛に任せて助けたまへとたのむより外はないのであります。何故と申に助くるぞよの勅命に順ふ心は。助けたまへとたのむより外はない。たすけたまへとたのむ心は。助くるぞよの勅命に順ふより外はない。斯様に御親切なる御教化を戴き乍ら。昔三業歸命と云ふ異解者がありて。助けたまへとあるからは。ごふぞ御助に預りたいと。行者の意業に願ひ求むる事トやなご。飛んでもない間違ひを骨張し。大谷の清流を汚さんと致しましたを。時の善知識本如上人深く御苦慮あらせられ。各々如何心得られ候や。上に示すが如く。彌陀をたのむと云ふは。他力の安心を安くしらしめ玉ふ教示なるが故に。助けたまへと云ふは。只是れ大悲の勅命に信順する心なりと。明白に御裁斷あらせられてあります。大凡たま

へと申す詞は。用處によりて意味が變りまして。一には下知の詞二には願ひ上る詞三には信ト任す詞。此三通の使ひ分があります。自分より目下の者に向て。箇様にしたまへと申付るときは。下知の詞となり。上たる人に向て申上るときは。願ひ上る意の詞となり。又我より始めて發起して云ふにあらす。人より仰を蒙りたる時に左様にしたまへと申す時は。下知でもなく願ひ上るでもなく。御意を信トて任せ奉る御受の詞となります。今は阿彌陀如來の御方より。間違はさぬぞよ助くるぞよの。仰を蒙りたるを其儘信トて任せ奉る。御受の詞であるから。我より始めて願ひ立る心では御座いません。助けたまへと云ふは。只是大悲の勅命に信順する心なり。信と疑はず順と逆はず。仰せに願ひ召に叶ふより外はない。若是が異解者の考ふる様に願ひ求むる事ならば。助けたまへとたのむではない。助

けたまへと願ふと云はねはなりません。然るに今此領解文は勿論。  
 八十通の御文章。どこでも助けたまへとたのむ。助けたまへと信ず  
 ると計り。御教化あらせられて。助けたまへと願ふと云ふ事は。只  
 の一返も仰せられた事はありません。斯く申しますれば。たのむと  
 願ふとは。一つ事ではないかと。申さるゝ御方もあるかは知れませ  
 んが。決して左様では御座いません。當世は願ふ事をたのむくと  
 申しますれども。是は俗用でありまして。決してたのむと云ふ詞の  
 正しい意味ではありません。正しい意味は信ずる事でありませす。信  
 ずるとはたのみにし力にする事でありませす。其證據は御文章の中に  
 誠に死せんときは。かねてたのみおきつる妻子も財寶も。我身には  
 一も相添ふことあるべからずと。仰せられてあります。此御詞でた  
 のむ意味が明に分ります。妻子や財寶に向て。我身の上を憐みたま

へ救ひたまへと。願ふて置く者はなければ。平生妻子をたのみに  
 し。財寶をたのみにし。それを力として居る事を。かねてたのみお  
 きつると仰せられたもので。今も恰ど其通り大慈大悲の親様が。我  
 等凡夫に對せられ。サー末代の衆生よ此世の日暮しに付てはたのみ  
 になるものもあるふ。力になるものもあるふ。妻子があれば妻子が  
 たのみ。財寶があれば財寶が力。病氣にならふが。年を取ふが。之  
 さへあれば大丈夫と。安心安堵も出来よふが。後生の一大事に付て  
 は。何がたのみになるものがあるか。力になるものがあるか。よく  
 く考へて見よ。善根があれば善根がたのみ。功德があれば功德が  
 力。何時命終らふとも。これさへあれば大丈夫と。安心安堵も出来  
 よふが。善根はもたず功德はなし。十方の諸佛にも恒沙の薩埵にも  
 永不成佛と見離され。必隨無間と見捨られた身の上やが。泣くな

歎くな悲むな。捨た諸佛がある故に。受取る彌陀は爰に居る。たのみになつてやろふ。間違さぬぞよ助けろぞよと。呼で下さる勅命一つが聞へたら。斯る淺間しき此奴を此儘ながらの御助けとは。さてく嬉しや難有や。何時命終らふとも。佛智の不思議に助けられ。蓮華の御座へ往生と。安心安堵の出来たのが。即ち雜行すて。彌陀をたのんたと申すもの。

第四十一席

前席に於て此領解文は申すに及ばず。八十通の御文章何處でも助け玉へとたのむ。助けたまへと信ずるとばかり仰せられて。助けたまへと願ふと云ふ事は。只の一度もありません。これに依て助けたまへとは。願ひ求むる事ではなく。只其大悲の勅命に信順する心なり仰せの儘に順ひ奉るより外はないと申して置きましたるが。且又萬一

たのむが。即ち願ふことならば。彌陀にたのむ彌陀に願ふと云はねばなりません。彌陀にたのむ彌陀に願ふでは。語を成しません。然るに今此領解文は勿論。八十通の御文章。何處でも彌陀をたのむと仰せられてありて。彌陀にたのむといふ御言葉は只の一度もありません。是から伺ひましても。たのむは願ふ事をない。信ずる事とやと云ふ事が明に分ります。信心と云ふは深く人の言葉をたのみて疑はざるなり。人の詞とは善知識の御詞。善知識の御詞が即ち御開山の御詞。御開山の御詞が即ち釋迦如來の御詞。釋迦如來の御詞が即ち阿彌陀如來の御詞で。阿彌陀如來の仰せられける様は。末代の凡夫罪業の我等たらんもの。罪はいか程ふかくとも。我を一心にたのまん衆生をば。必ず救ふべしと仰せられたり。いかに罪深くとも心配すな。たのめは必ず助けるとあるが如來の勅命。處で罪や障は

心配はないが。たのめたすけるが氣にいらぬ。たのまねはたすけられぬとは。何やら少し水臭い。たのまひでも助けて下さりさふなみのトやと云ふ様な。誤に落入てはなりません。昔一休上人が蓮如上人に對し「阿彌陀には誠の慈悲はなかりけり。たのむ衆生をわけて救へば」と難せられますと。蓮師の御答に「阿彌陀には分る心はなければ。蓋ある水に月は宿らト」と御意あらせられますと。一休上人も殊の外御感心あそばしたそふであります。サ一皆様の胸は云何トや。御助はありがたいが。たのめの御意が咽につまりて。ぎくしやくと困て居る人はありませんか。困るではありません。難有いのであります。何故なれば前席にも申す通り。たのむとは當に力にする事で。我をたのめとは。おれをあてにせよ力にせよと。呼て下さる勅命で「たのませてたのまれたまふ彌陀なれば。たのむ

心も我と起らト」世間に孤兒と申すものがあります。孤兒とは上畧の言にして。具にはたのみなし子と云ふことで。兩親には死別れ。兄弟には離れ。右を眺めても左を見ても。知らぬ他人計り。たのみになり力になる身寄の無くなつたものを孤兒と申します。誠に可愛そふを哀れなものであります。他の子供は益正月とか祭禮とかには親兄弟が付て居て。着物もさせ小遣も與へて貰ふ。それやこれやを見るに付け聞に付け。心細ひ月日を送り。人知れず涙に袖を絞。泣々日暮ををする中に。其叔母が尋ねて來て。其方は兩親にも別れ兄弟にも離れ。獨身になつて定めて不自由であつたらふ。私には幸ひ子供はなし厄介はなし。依て今日からは私が萬事世話をするから必ず案卜るには及ばぬ。着物がほしくは着せてやるふ。小遣がなけりや與へると。懇に言ふて呉れる。其時の小供心はとふせよふ。

たのみの盡私を御親切なる。御慈悲の御言葉。それなら宜しくたのみますと。任せるより外は御座いますまい。今も丁度その如く。十方の諸佛に見捨られ。右眺めても左ながめても。助かる縁の盡きはてた。必墮無間の孤子が。阿彌陀如来なればこそ。案するな苦しにするな。今日からは此彌陀が引受てやる程に。願がほしくは願もやる。行がほしくは行もやる。其方の爲に成就したのが。南無阿彌陀佛の名號ゆゑ。其儘我に任せよと。御懇ろなる大悲の勅命を聞て見りや。どうたのんたらよからふか。こうたのんたらよからふかと。思慮分別の場所ではなひ。斯る機までも御助け下さるゝは。阿彌陀如来御一佛と。ヒシとすがり参らするより外はないので。是が即ちた後生助けまへとたのみ申したと云ふものであります。

第四十三席

たのむとは當に。力にする事にて。我をたのめとは。己を當にせよ力にせよと呼で下さるゝ勅命トや。我身の後生となりて見れば。無善可怙無徳可恃。たのむべき善根もなく功德もなく。節斯は近まる錢はなし。後生は近まる功德はなし。斷り云ふても斷りは立たず無常の風に容赦はなし。あてもたよりもない奴に。泣な歎くな悲むな。己を當にせよ力にせよ。ある罪咎は己が受取り。持ぬ功德は己がやる。心配するな苦しむな。我をたのめよ必ず救ふぞよ助けるぞよ。是が御慈悲のありたけである。然れば即ち此たのめ助くるの勅命は。當流の肝要。阿彌陀如来の御慈悲の有丈を。知らせて下さるゝ仰せにして。當のない身に當が出来。便のない身に便が出来る難有い仰である。然るに此意を知らぬ故に。たのめたすくるとあるからは。たのむ丈はたのみにやならぬ。こうたのむのトや。あゝた

のむのトやと。たのみ持にかゝりて居る人があります。彼の播州の  
 三木と云ふ所に。形屋五左衛門と云ふ。難有同行があつて。其女房  
 も随分出離に骨折つた人で。主人の五左衛門は。御正意であつたが  
 女房は所謂意業つので。たのめ助くるの勅命トやで。たのむは。  
 こちからからたのまにやならぬと云ふ。いや左様ではないと云ふても  
 中々承知せぬ。處か或時の事近所に婚禮がありまして。其處の風儀  
 として。名染の爲とて近所の内儀達に。饗應の案内をします。表口  
 から使が参りまして。扱て此度嫁を貰ひ受ましたから。何の風情も  
 御座いませぬが。御名染のため。明日は御酒一獻。差上度存トます  
 から。明日の正午十二時に。御苦勞ながら御尊來下されたいとの案  
 内。内儀は固より主も承諾。直に髮結を呼にやるやら。簞笥から着  
 物を出すやら。これがよかるるか。あれがよかるるか。いやはや大

騒動。さて翌日は朝早くから。風呂を焚き洗ふやら磨くやら。彼此  
 する間に。はや十一時表口から時分使。何卒只今御苦勞乍らと。ま  
 た身仕舞最中。又候案内。最早皆様御揃で御座いますから。何卒御  
 早ふと云ふて來た。いやはや氣が違ふた様に。周章さわいで塗たり  
 掃たり。はがしたりして居ると。今度は先方より番頭が出て來て。  
 皆様御揃で御座いますに。また御尊來下されぬは。どこぞ御惡ひの  
 ではないか。又御案内に不都合はないか。私に往て來いとの事で御  
 座います。これはく重ねくの御使。只今直に参りますと。着物  
 着かへてそろくど。主人の傍に行き。左様なら往て参りますと云  
 ふと。主人は何處へ行く。何處へ行くとは奇妙な御尋ね。受た使は  
 一度や二度ではありません。其時主人の五左衛門が。併し直には往  
 かれまい。一度先方へたのみに往て。それから後で出直して往かね



ぼなるまい。豫て汝は頼め助くるの勅命トやぞ。たのむはこちらか  
 らたのまにやならぬと云ふて居るではないか。西岸上の浄土から。  
 来ひよ来れよの御案内は。五度や十度の事ではない。忍界教主の釋  
 尊は。娑婆往來八千返。引續て三國の七高僧。重ねくの御使に急  
 ぐ機のない我等故。番頭ではない手代ではない。極樂浄土の檀那様  
 が。我が使に我ぞ來にけりと。主人の言に女房も初めて回心とひる  
 がへり。案内うけた此身なら。四の五の云はず逆らはず。直に往く  
 身と落付のが。一心歸命の御領解とけ。今こそ明かに知られたりと  
 踊り舞して喜んだとあります。サ一同行衆さかふぞ。たのめたすく  
 るとあればとて。たのみ拵するのぢやない。凡夫不成の迷情を運ぶ  
 にあらず。助けたまへと云ふは。只是大悲の勅命に信順することろ  
 なり「たのむとは聲も言葉もなかりけり。すがる思ひをたのむとは

云ふ「すがるとは凡夫自力をすてはなれ。本願方に任ずるを云ふ」  
 任すとは罪ありながら此儘と。我を忘れて信ずるをいふ「信心の其  
 源を尋ぬれば。あら尊やといふころなり」

第四十四席

たのむが即ち信。信が即ちたのむ。口音でよむと訓でよむとの違ひ  
 て。意味は少しも異りません。然るに信は唯疑晴るゝことで。たの  
 む事ではない。疑晴た其上に別にたのむ思ひが無くてはならぬ杯と  
 云ふ。一類の學者もありませんが。若し然らば一宗開闢の御本典が不  
 完全な者となりませす。何となれば御本典は。信證直接で信の卷の次  
 が。直に證の卷唯信の一因で大般涅槃の證を開くぞよとの御教化で  
 あります。然るに萬一信とたのむと義別なるときは。御本典には彌  
 陀をたのめの御教化が無ひ事となりまして。畢竟不完全なもの申

さねはならぬことゝなります。何と恐れ多ひことではありませんか  
 信とたのむは體一義別ぢやなごゝ。そんなぬるひ事を申しまするは  
 畢竟たのむは信の和訓なることを知らぬからで。御開山様は佛智の  
 不思議をたのむとも。不思議の佛智を信ずるとも仰せられ。蓮如様  
 は助けたまへとたのむとも。助けたまへと信ずるとも仰せられ。た  
 のむと信ずるとを。換詞にして。同様に御用ひなされてありますか  
 ら。たのむが即ち信。信が即ちたのむ。只音で讀むと訓で讀むとの  
 違ひで。意味は少しも異らぬと云ふ事は。明か御座います。左様  
 な理窟めいた事は暫く御預りと致しまして。さて皆様方たのむ味が  
 分りましたか。よくよく聽聞して置ませぬと。臨終にうろたへます  
 るぞ。元祖御在世の砌。御開山と信心諍論をなされた。あの勢觀房  
 は元祖の御在世には。それ程に大事が心にかゝらなると見へて。

後生に付て案ト心もなかつたが。法然聖人御往生の後。たのむと云  
 ふ事が苦になりたして。御師匠様御一代の間は。うかくと聞て居  
 たが。彌陀をたのめ彌陀をたのめと仰られたは。如何してたのむこ  
 とぢやしらん。こうしてたのむか。あゝしてたのむか。心の  
 内での様に思ふて見られても。たのむ味が分りません。それは其  
 咎。他力よりたまはる信心が。我心をさがしてあるふ道理は御座い  
 ません。如何しても決定心になられぬ故。それを苦にやみ。食も咽  
 へ通らぬ様になり。今にも死んだら身には。三衣を着し乍ら。口に  
 は念佛を稱へ乍ら。地獄へ往かねばならぬかと。思へは實に情ない  
 事ぢやと。餘り心配致され。うつらくとせらるゝ内奥州の方へ下  
 る夢を御覽なされた。不圖道に踏迷ひ行てもく草原ばかり。こり  
 や何とこよふと思ふて御座ると。子供が七八人草を蒔て居る故に。

こりやく子供衆。奥州へはとふ行くぞ教へて貰ひたいと云はれま  
 すと。ハイと云ふて其中より。賢こそふな八才計りの子が。モーシ  
 御出家道は随分教へますが。私も少々御尋ね申したい事が御座いま  
 す。何トや。ハイ私未來助かる御法が承り度ふ存トます。こりや賢  
 ひ子トや感心な事トや。随分教へてやろふ。勸善懲惡と云ふて。惡  
 ひ事を慎み善ひ事を勵め。ハイ難有う御座います。惡ひ事が慎ま  
 れ。善ひ事が勵まるゝものなら。彼尊に御尋ね申しは致しません。  
 我身はわろき徒者。唯知作惡の泥凡夫。仕様のない奴で御座ります  
 るで。此機のなりで助かる御法があるならば教へて下され。御頼み  
 申上ますと。こりやゑらい事を云ふ子トや。左様なら彌陀をたのめ  
 ハイ其たのむ味は。如何で御座いますと。問はれて勢觀房はぎつち  
 りつまり。其味は己も知らぬ。何を隠そふ法然聖人の御門下では。

二番と下らぬ上足の弟子でありながら。御存生の間うかくして御  
 滅後の今となり。たのむ心が分らぬで。それ計りを苦にやんで。食  
 も咽を通らぬぞよ。東西わからぬ其方でさへ。それ程まで以後生を  
 苦にやみ。たのむ味を尋ぬるに。朝夕おそばに居り乍ら。後生の大  
 事に横着かまへ。今となりては御師匠様はなし。やみく地獄へ落  
 るかと思へば。其方の手前も面目ない。嗚や七寶莊嚴の御浄土より  
 御師匠様が御覽なされ。慈悲の御目に血の涙を流させらるゝと思へ  
 は。嗚呼情ない身の上トやと。玉の様なる慚悔の涙。其時件の草苴  
 が。さてく是非もない。彼尊が御知りなされねば仕方かない。左  
 様なれば此向に川が御座います。其向に寺が御座います。それへ  
 参りて聞きます。後生の大事は延してはおけませぬ。左様なら何  
 卒己も連れてと。勢觀房は子供につれられ向へゆけば。成程大な川

がある。直に小船に乗り右の子供が棹して。川の中流迄行く。風も吹かぬに船がころりと轉覆りた。勢觀房は水心はなし。浮ひつ沈みつ苦んで居らるゝ。心の内嗚呼情なや。此儘死んたら直に地獄へ落るが何としよふ。助けて呉れる人はないか。たのむ味さへ知れたなら何時死んでも案トはないが。もふ暫く死にともないとおぶくして居る首筋を。誰かは知らずとつかり捕へ。助けてやろふと引上られ。嗚呼うれしや扱は助けて下されますかと。振向て見らるれば草苧子供と思ひの外。御隠なされた御師匠様が。勢觀房たのむ味はこれぢやぞよ。生死の海に浮みつ沈みつする者を。こちらの方から先手をかけて。たのむトやないぞ。あなたの方から先手を掛て。助けてやろふの御喚聲。間違さぬぞの御誠を戴く思ひのあり丈を。たのむ一念の味トやと仰せられたと思ふたりや。はつきりと夢が覺め

往生安堵の身となられ。一生の間御恩の稱名を相續し。芽出度往生を遂げられたとある。何と同行衆たのむ味が分りましたか。こちらの方から計ひ立てする間は。此味は分りませぬ。生死の苦海ほとりなし。久しく沈める我等をば。彌陀弘誓の船のみぞ。乗せて必ずわたとける。浮びつ沈みつして居るのが。御座にこふした此姿。嗚偽の心中にたのむ思ひがあるではないぞ。彼尊の方から先手をかけ。久遠劫來追掛回り。不實たらけの私を。首筋とらまへ間違わさぬぞ助けてやるぞの御誠を戴かれたが誠なら。斯る機迄も御助とは。やれく嬉しや難有やと。仰ぎ上ては南無阿彌陀佛。

第四十五席

助けたまへとたのむとは。他力信心の戴き振を。やすく知らしめ玉ふ御詞にして。我身は助かるべき縁も便もなき身なるを。彌陀の本

願のみ。斯る淺間敷機を本と助けたまふにより。一心に疑はずたのみ信せよと示したまへる。如來の勅命に順ひ奉り。御意の儘に助けたまへと打もたれ。往生の大事を如來に任せ奉り。疑はず危ぶまず安心するより外はないのであります。サ一此味が分りましたか。他力の信心が戴かれましたか。若も未だ戴かれない身の上なら。何時とも知れぬ露の命。今にも息され眼の閉ち次第。手には珠數を爪繰りながら。口には念佛稱へながら。死に行く先は眞暗闇トや。斯く申せば設ひ第十八願の御信心が戴かれて居らないにもしろ。平生御念佛を稱へて居るから。十九二十の行者の仲間入は出来てある。それ故に報土の往生は叶はずとも。臨終來迎にあづかりて。化土の往生が出来る。地獄へ落る筈はないと。思はるゝ人もあるかは知れんが決して左様な譯では御座いませぬ。自力念佛の行者にして目出度

化土の往生を遂る者は。百時希得二一二千時希得二五二三百人の中に一人か二人。千人の中に三人か五人。實に危ひものである。何故かと云へば疑心の善人なる故に。方便化土にとまるなりと仰せられて化土の往生を遂る者は、疑心ながらも善人である。疑心の惡人では御座いませぬ。疑心の善人とは。娑婆を厭ふ心がありて。已が至心を以て佛の名號を稱へ。稱へた功德を以て往生したいと勵みをいれ毎日く三萬五萬と數を積む程の人達である。我等は其様な事は出来ずまい。然らば疑心の上に惡人なれば。化土の往生も出来ませぬぞ。依て蓮如様は化土の事は。一寸も御沙汰はなされませぬ。此信心を獲得せずば。極樂には往生せずして無間地獄に墮在すべきものなり。道二つ仁と不仁とのみ。未來迷ふか證るか鬼か佛か菰をかぶるか。錦を着るか。爰が實に大事の堺目であるから。よくよく

聽聞せねばなりませぬぞ。斯く申せば私は度々聽聞致しまして。御  
 安心の筋道だけは能く分りましたが。如何云ふ者が戴かれません。  
 其證據には往生の一大事に。安堵がなりません。こりや云何したら  
 宜しふ御座いますよふと。尋ねらるゝ人もあるが。それに就ては別  
 段めづらしひ。手段方法のあらふ筈は御座いません。蓮如様の御教  
 化に。至て堅きは石なり。至て柔かなるは水なり。水よく石を穿つ  
 心源もと徹しなほ。菩提の覺道何事か成せざらんと。云へる古き詞  
 あり。いかに不信なりとも。聽聞を心に入れ申さは御慈悲にて候間  
 信を得べきなり。只佛法は聞にきわまるなりと仰せられて。解脱の  
 耳をすまじ渴仰の頭をうなたれ。飢て食を思ふが如く。渴して水を  
 求むるが如く。心に入れて聽聞するより外はありません。昔音羽の  
 明詮律師。若年の時南都興福寺に入り。法相を學ばれたが。性質鈍

くして學問が上らぬ故。自ら退窟して。モ一故郷に還りて還俗せん  
 と戻りがけに。大佛の前で時雨に逢ひ。大佛殿に立寄て休みながら  
 雨滴を敷石に穴があいてあるを見て。大に感せられ。水は柔に石は  
 堅し。歲月の久しき水も石を穿つ。何程覺悟のわるひ私でも。學べ  
 は學者になられぬ事はないと。それから一心堅固に勉強して。後に  
 は名高き大徳になられました。信決定の人を見て。あの如くならで  
 はと思へばなるぞと仰せられ候。精神一到何事不成。各々方もなら  
 れぬ事はない。乾きつたはくちには火を打かければ。九つた一打で  
 火はつきますが。濕つたはくちは一度や二度では中々つきません。  
 乍併いくら濕つたはくちでも。またしてもく火を打掛けると。何  
 時の間にやら濕が乾て火が付く如く。御座を重ねて聽聞すれば。何  
 時の間にやら。御慈悲にて候間。信を得べきなり。久遠劫來の初事

に捨て難い雑行雑修も自ら捨たり。晴れ難い自力疑心も自ら晴れ。斯る淺間敷此奴を。此儘乍らの御助けとは。さてく廣大な御慈悲ぞと存せられたが聞信一念。此一念臨終までとほりて往生するなり死にたい事はなけれども。御縁が盡れば唯今でも。御待設けの御淨土へ。大手ひろけて往生と。安堵決定の上からは。信火内にあれば行烟外に顯るゝ道理であります。

第四十六席

申して候とは奉りて候と云も同トことです。口に陳ることを申すと云所もありますれども。今はそうではありません。崇め敬ふ詞にて奉の字の和訓であります。日本書紀にも。諸政を奉と宣ると。奉の字を申すと讀ませてあります。然るに異解者が申すとあるからは口に申さねばならぬ。後生助けたまへと心にたのむばかりでない。

人に何かを願ふ時の様に。口上に言ひ顯さねばならぬ杯と。飛んでもない間違ひを骨張いたしました。萬一そうであるならば。八十八通の御文章に。助けたまへと口に申せとの御教化がなけねばならぬ。稱名は口業なること明白なるに。度々聲に出して聲に稱へてと仰られてあります。かゝる御親切なる御文章であるのに。口にたのめ口に申せと仰せられたことは。只の一返もございませぬ。加之たのみ申す。たのみ奉ると。換詞に御用ひなさるゝ所を見れば最も明白であります。さて是で安心の戴さぶりの一段は辨ト終りまして。次にたのむ一念の時。往生一定御助治定と存ト。これたけが結前生後の御言で。上の安心を承て即得往生の現益を示し。信心一つが極樂參りの種である。たのむ一念の時不可思議の願力として。佛の方より往生は治定せしめたまふが故に。一念の信心發得已後の念佛をは。

自身往生の業とは思ふべからず。只偏へに佛恩報謝の爲と心得らるへきものなりと。下の報謝の一段を引起さん爲めの御文であります兼々御聽聞の通り御當流におひては。他力の信心に就て一念と相續とを御分けなされ。曠劫已來の初事に本願の御謂れを聞開き。明來闇去々々明來。疑晴れて彌陀をたのみ奉る。初一念の所をさして。一念と仰せられ。其信心決定の上より一生の間。其信心の儘を相續して。彌々佛恩を喜び報恩謝徳の稱名を相嗜み。喜び勇んで日暮致しまするを。相續とも多念とも仰せられてあります。此二ある中。往生の定り場は。どこであるかと伺へは。未だ信心を得ぬ前に。往生が定るでもなく。又一念の信心を得ても衆生の三業に顯はれぬは助からぬと云でもなく。又臨終を待て來迎を拜んで。それで往生が定るでもない。信心の戴き場が往生の定まり場。時を隔てず日を隔

てず。間に髪を容れず疾雷耳を掩ふに暇あらず。たのむ一念の時往生は一定御助は治定ぞよとの御教化。是が即ち今家別途の法門で。他家には曾て御沙汰のなひことで。同ト淨土門の中でも。鎮西では往生の定まり場は臨終のとき。西山では十劫の昔。今御當流では十劫の曉天に。南無阿彌陀佛と云ふ正覺を御取り遊ばしたときは。惡人女人の往生の道具の出來上た時。凡夫の方の往生の定まる時刻は十劫の昔ではない。臨終の夕ではない。信心歡喜乃至一念。自力を捨て如來をたのむ一念であります。彼の娘を嫁に取りたいと願ふ。是が法藏因位の御願。相談がきまつて支度の出來たが十劫正覺。相談はきまり用意はちやんと出來ながら。日限の定まらぬは。肝腎の處女が承知せぬからであります。何時でも娘さへハイと承知をするなら。娘の承知する時が。嫁入の日限治定の場所トや。法藏因位の



其昔。我等が往生を願はせられ。彌陀正覺の曉に。惡人女人の嫁入道具。一も残らず御成就はなされたが。今日迄往生の日限の定まらなれたは何故なら。肝腎の嫁入娘の我々が。兎角仰せに従ひかね。あゝのこふのと小言を云ひ。さふしてこふしてと心の世話にかゝりはて。御慈悲を背にして居た故に。往生の道具は出來上り乍ら。今日迄往生の日限が。定まらなれた。然るに今日と云ふ今日は。祖師善知識。御媒酌の手をかへ品をかへての御教化に依り小言云ひく聞く内に。其の小言の手が盡て。いよくかゝる者を御助ぞと。聞開かれた一念に。往生一ツを御定め下さるゝ。乃で御和讃に。金剛堅固の信心の。定る時を待ち得ぞ。彌陀の心光攝護して。永く生死を隔てける。十劫已來待ちかね玉ふ歸命の一念。一劫待ては待損ト。二劫待ては待損ト。十劫已來待損をして下されたが。今日と云

ふ今日初めて斯る機までも御助けぞと。六字の謂れが聞ゆるなり。今はどうく待おふせたと。此阿彌陀如來は深く喜びまじまじして。攝取の光明におさめ取て下さるゝ。かるが故に如來の誓願を信トて一念の疑心なきときは。如何に地獄に落んと思ふとも。彌陀如來の攝取の光明に。おさめ取られまいらせたらん身は。我はからいにて地獄へも落ちずして。極樂に參るべき身なるが故なりと。御意あらせられてある。

第四十七席

たのむ一念とは。即ち成就の文の信の一念であります。此に就て信卷には時刻に約すると。心相に約するとの二の御釋がありまして。一に時刻に約するとは。斯顯信樂開發時尅之極促と仰せられ。二に心相に約するとは。信心無二一心故曰一念是名一心と。仰せ

られてあります。全体成就の文の信一念は。時尅の極促を顯はす一念で。即ち多念に對する初一念の事でありませす。多念を待て往生が定まる者ではない。それトやに由て。十聲の稱名で往生の定るでもなし。乃至三聲二聲一聲の稱名で。往生が定まるでもない。唱ふる稱名を待たず。唱へぬ先の聞其名號信心歡喜の一念に。往生が定まるぞよの御教化であります。然るに更に別義を設けさせられて。信心無二一心故曰二念一名二一心。一念の一字は無二の義で。餘行餘善に心をよせず。餘の佛菩薩を念せず。只阿彌陀如來一佛を念する心ちやに依て。一念と云ふぞよと仰せられてある。何のため此御釋を設けさせらるゝなれば。因願の三信をつゞめたが。論主歸命の一心。其一心が即ち成就の信の一念で。歸命の一心と信の一念と其體一ちやと云ふ事を顯はす爲の御釋であります。今此領解文は其

信卷を御相承なされ。上の段では因願の三信をつゞめた一心。其一心が即ち成就の信の一念。乃で爰にはたのむ一念の時と仰せらるゝされば歸命の一心を戴て。無疑無慮彌陀をたのんだ身の上なら。乃至一念即得往生幾回もくたのんで。漸々往生の御約束が定ると云様な。のびくの事ではない。たのむ一念のとき。往生一定御助治定。其迅速なる事を喻へて云はし。權衡で物をかけるに。一方が昇れば一方が低る。昇りてから低るやら。低りてから昇るやら。昇ると低ると一時なれば。どちらが前どちらが後とも分らぬ如く。憑みまして御助が定るやら。御助が定てから憑みましたやら。其先後は知れませせん。前念地獄界裡人。後念彌陀會中衆。たつた今迄地獄行の大罪人であつたものが。早や極樂の聖衆の一人。鬼と佛の早變りをさせて下さるゝは。神力自在の御腕前。奇妙不思議の御手際で

三世十方の諸佛も菩薩もあまればて、「これは」と計り花の吉野山」稱讚不可思議功德。一切諸佛證護念經。不思議くと讚嘆あらせらるゝ。昔吉野に智行兼備の高僧があらまして。或時大病を煩はせられ。醫者よ薬よと。種々手當を致せども。更に其驗が見ゆませぬ。乃で醫者が是は身體が非常に弱りてある故。薬の利目は見ゆませぬ。ちと魚類をも召上つたらよからふと云はれても。高僧はなかく合點なさらぬ。御弟子衆が是非共進上致したい。一日も早く御全快がありたいものぢやと。小僧を町に遣はして。魚を買はせました。小僧は魚を買取て歸る途中で。所の人に小僧様何を買ていらしやつた。箱の中は何で御座ると問はれて。小僧は吃驚。此箱の中は法華經八軸です。何ぢや魚の汁が出てあるのに。人を誑るにも程がある。亂暴至極の男と見へ。ひつたくりて蓋をあけたら。思ひが

けない法華經八軸。乃で小僧は勿論蓋取つた者も呆れはて。扱も不思議や疑もない魚なれども。其魚が今立所に。法華經八軸と變つたは。師を思ふ弟子の誠か師の徳か。佛法力の不思議かと邪見の心を改めて佛道に入りたとあります。今たのむ一念が其通りで。疑もない五障の女人五道の惡人。地獄の炎の近寄つた。大惡人の御座の我々。地獄者に違ひはなれども。されは無始已來。造りと作る惡業煩惱を。残る所もなく願力不思議を以て。消滅する謂れあるが故にたのむ一念に蓋あけて見たら。正定聚不退の位に住すと申すなり諸上善人俱會一處。目出たい身體と變てある。何と不思議な事では御座いせんか。汁のたる魚が蓋明けて見たら。法華經八軸。云何なる者も我折ぬ者はよもあるまい。汁のたるよふな地獄者参りしなには後や先に鬼の附添ふた此身體が。蓋あけて見たら。正定聚の

分人。右には観音左には勢至。影の形に附添ふ如く。無量の聖衆に取巻かれ。下向するとは扱も不思議や難有や。

第四十八席

たのむ一念の時往生一定御助け治定と。安堵決定の上からは。毎日の日暮とは。極樂参りの道中と心得。喜び勇んで報謝の稱名諸共に。家業渡世を勉強致しまするが。金剛堅固の信心の姿トや。元祖法然様の御言葉に。人の手から物を貰ふ約束した計で。未だ此方へ取受ぬと。已に受取つたとは。どちらが慥なぞ。約束變改常のならひ。取り得ぬ事は不定なれば。受取ぬ間は安堵はならぬが。此度の極樂参は。其様な不定の事ではなふて。彼の約束の物を貰ひおはせて手に入た如く。往生の寶を受取た心で。さても嬉しやと報謝の念佛申すぞと仰せられ。同く御弟子の禪勝房人に向ふて。其方はい

かばかり往生を慥に決定せられたぞと尋ねられたれば。私が領解は右の拳で左の拳を打つに。打はづすまトき程に。慥に決定致しましたと申したれば。禪勝房はあら危なや。右の拳で左の拳をうつに。滅多には打はづすまひけれども。萬一誤りてはづれまいものでもない。拙僧が領解は。生者必滅の常理。此世に生れた者は。必ず死ぬるに違ひのない如く。我往生は一定と安堵したぞと答へられたとあるが。禪勝房にもせよ。御座の我等にもせよ。凡夫の心と秋の空。一夜に七度變ると云ふ。變り易ひ此心疑ひ深ひ此心が。往生一定と安堵して何時思ひ浮べても元の如く。相變らず露塵程の疑ひも起らぬとは。扱も不思議や如何なるものかと尋ねて見れば。一念歸命の信心は。行者の起す處の信心にあらず。一度は信せさせずはおくまい。救ひ取らずはおくまひの。大慈大悲の御念力が。到り届ひて下

された。他力回向の大信心で御座いますから三毒の煩惱はとぼく  
 起れ共。誠の信心は彼等にも障へられず。風吹かは吹け波立たば立  
 て。何時死なふが終らふが。往生一つは間違なく。御待設けの御淨  
 土とは。扱も嬉しや難有や。自力聖道の御話を聞て見りや。五十年  
 や七十年の修行では。未來は海とも山とも分らぬと申されます。慈  
 鎮和尚は我御開山の御師匠。天台宗の座主大僧正で。舍那圓頓の菓  
 を拾ひ。止觀三密の水を汲み昨夜も座禪今日も觀念と。自力の修行  
 をなされて御座るに。今日も未來の見留がつかず。後生の明が立た  
 ぬと。悲しんで御座る處へ。とほんど聞ゆる入相の鐘「今日の日も  
 暮るゝと告る鐘の聲。身にらみてこそ涙こぼるれ」天台宗の大僧正  
 慈鎮和尚ですら。是れであるのに。一日半日修行した覺ゆのない此  
 奴が。後生一つは安堵して。御恩を喜ぶ身となるとは。天地に躍り

て喜んで。あきたりのない仕合事なり。

第四十九席

往生一定御助治定とは。我往生は一定如來の御助は治定と云ふ事  
 往生一定は入正定聚の益。御助治定は攝取不捨の益であります。然  
 り而して此二は遂に一に歸する故に。御開山様は攝取不捨の利益ゆ  
 る。等正覺に至るなりとも。攝取不捨の故に正定聚に住すとも仰せ  
 られてあります。さて其正定聚とは。如何なるものかと尋ねて見れ  
 ば。自力聖道の御宗旨に於ては。佛道修行なされるに御位が三段に  
 分る。抑も佛道修行と歩み出してから。十信の位迄を邪定聚と云ふ  
 それから十住十行十回向の間を三賢と云ふて。是を不定聚の菩薩と  
 云ふ。未たさふも佛になると云ふ。末の見通が付かぬに依て。不定  
 聚である。それより初地の菩薩から十地の間をば正定聚の位と云ふ

其初地の菩薩からは。もふ彌々佛に成るに極つた。御身分ぢやに依て。正定聚の位と云ふ。處が此初地の菩薩になる迄は。一大無數劫の修行を成就せねば。此位には登られぬとあります。もふそれで菩薩方は百佛世界へ身を分て。八相成道を示さるゝ程の。大菩薩様ぢやとある。何と尊ひ菩薩ではありませんか。今他力眞宗の御同行は其一大無數劫の修行どころか。一願起した覺ゆもない。曾無一善の此奴が。聞得る信の一念に。彌陀の心光攝護して。永く生死を隔てける。往生は一定御助は治定。いよく佛になるにきまつた身分ぢやに依て。取も直さず正定聚の菩薩の仲間入りで。是が即ち別途不共の法門にて。他宗他門におさましては。曾て御沙汰のない事であります。昔叡山に一如律師と云ふ。大徳の學者があつて。京の清水寺で講釋をして居られた處が。或時の話に世界には妙な事もあるも

のトや。此間坂本の或信徒の家で。座敷へ休んで居たら。臺所へ一人の老婆が來て。話をして居るのを聞けば。最早正定聚の菩薩並トやと仰しやるで。何事も堪忍して暮さにやならぬと。話して居る故正定聚の菩薩なみと云ふは。どんな人ぢや知らぬと。襖の透間から覗ひて見たら。穢ひ木綿着物を着て居る。六十餘の老婆であつた。それから其老婆が歸た後で。其家の亭主に彼はどふいふ老婆ぞと問たれば。六條の婆さんで。大谷參をして歸られたので御座りますると云ふた。氣違ひと見ゆななたが。妙な事を云ふ者があるものぢやと。呆れ入つて。斷。其時其講筵に眞宗の所化が居りまして。それは私共の宗旨には。常々申し談ずる事で。信心決定の身は。往生は一定御助は治定。正定聚の密益ありと申すが。開山相傳の教化を御座いますと云ふたれば。流石の一如律師も感心せられ。其教化を

あの愚な老婆が得心して話すと云ふは。實に親鸞聖人の勸化は。末代の今日に並びのなない宗風トや。成程此六十餘州に。日に増し夜に増し御繁昌あるは。尤も至極な事トやと。讚歎せられたと云ふ事でありませうが。他宗他門に並びのなない。斯る廣大の御利益を戴き奉る身の上とは。さて、嬉しや難有やと。存せられたであらふぞなら佛とも法とも知らぬ人ぞさへ。人間の道は守るもの。別して信の上からは。他に後ろ指をさされぬ様。仁義五常を頭に戴き。眞俗二諦を兩手に握り。家内中よく睦まじく家業渡世に勉強し。近寄浄土の御果報を。待受らるゝのが何よりの仕合。

第五十席

たのむ一念の時往生一定御助治定。極樂参りに間違はありませぬぞ源と大經の上から伺ふて見ますれば。衆生が佛にならずは。我も彌陀とは呼ばれまいと。一度ならず二度ならず。四十八度の其上に。又重ねて誓不成正覺誓不成正覺と。三返まを正覺の命を投出して。御請合なされた法藏比丘が。彌陀と云ふ正覺を御取あそばしたから。早我往生すべき御法は成就した事ぞと。彌陀正覺の御相を拜んたら。愈此惡人が往生するに間違ひないと。疑ひを晴らせとの御教化。依て夏の御文章の上には。安心決定抄に依らせられ。それに付ては。先づ念佛の行者南無阿彌陀佛の名號をさかば。あゝ早我往生は成就しにけり。十方の衆生往生成就せずば。正覺取らトと誓ひ玉ひし。法藏菩薩の正覺の果名なるが故にと。思ふべしと云へりと仰せられて。南無阿彌陀佛と云ふ。彼尊の御名を耳に聞かば。もふ御助けは聞くに及はぬ。あわ早我往生に間違ひと思へとある。又次の御言に又極樂と云ふ名をさかば。あわ早我往生すべき處を成就し

たまひにけり。衆生往生成就せずば。正覺取らトと誓ひ玉ひし。法藏比丘の成就したまへる。極樂よと思ふべしと。御意あらせられ。極樂と云ふ名をさかば。もふ御助をさくに及ばず。我參る淨土は出來たと思へとある。併し乍ら我等如き徒ら者は。親は子を疑ひ。子は親を疑ひ。夫は妻を疑ひ。妻は夫を疑ふ程の淺間敷。疑ひ深ひ凡夫であるから。彌陀一佛の御誓ひでは。若しや間違ひはせぬかと疑ふては。五劫永劫の思案苦勞も水の泡と思召させられ。第十七願の上へ已が佛になりたなら。十方の諸佛にはめられて。惡人女人の疑ひ晴さずば。おくまいと御誓あらせられ。其願虚しからず。阿彌陀經には。六方恒沙の諸佛方が。各々其國に在して。廣長の舌相を出し。遍く三千大千世界に覆ふて。誠實の言を説きたまはく。サ一惡人よ疑晴れて本願を信せよ。サ一女人よ其儘なりで彌陀をたのめ。

たのんた者の往生の間違ふ氣遣はないをよと。御勸めあらせらるゝ一佛を疑ふは。一切佛を疑ふので。一佛を信するは一切佛を信するのである。爰の所を法然様の御化導には衆生是を信せざらん事を恐れて。六方に各恒河沙の諸佛まじくして。大千に舌相を舒て證誠と玉へり。善導釋して云く。此證に依て生るゝ事を得ずは。六方如來の舒たまへる舌。一度口より出終りて。長く口にかへり入らずして。自然に壞爛せんと玉へり。然れば是を疑はん者は。彌陀の本願を疑ふのみにあらず。釋尊の所説を疑ふなり。釋尊の所説を疑ふは。六方恒沙の諸佛の所説を疑ふなり。即ち是れ大千に舒べたまへる。舌相を壞爛するなり。若又是を信せば只彌陀の本願を信するのみにあらず。釋尊の所説を信するなり。釋尊の所説を信するは。六方恒沙の諸佛の所説を信するなり。一切の諸佛を信するは。一切の法を



信するになる。一切の法を信するは。一切の菩薩を信するになる。此信廣くして廣大の信なりと仰せられて。是程確な事は御座いません。阿彌陀如来は一度ならず二度ならず。四十八遍まで正覺の命を賭物にして。萬一助け損ひがあるふなら。極樂淨土も野原になり。落る女人の先駈して。地獄の釜敷になるぞよと。御誓ひあらせられ六方恒沙の諸佛方は。舌を質入にしての御請合。よりてかゝりて間違ひない。聲を揃へて呼びかけ玉ふ。御親切なる御思召を載て見れば。疑ひたうても疑がはれず。危みたふても危まれません。斯る淺間敷此奴を。此儘ながらの往生とは。さても嬉しや難有やと。安心するより外はない。讚州に庄松と申す珍らしひ信者がありました。或時此人の處へ友人がまいりまして。我々の様な淺間しひ惡人凡夫が極樂參りが出来るでありませんか。尋ねましたら。庄松は何も云

はずに。障子をあげトつと向を見渡し居りましたが。少焉あつて大丈夫。間違は御座いません。それは何故で御座います。されは阿彌陀經の上では。十方恒沙の諸佛が。舌を賭物にして。證據に御立あらせられ。萬一彌陀をたのんた衆生が。地獄へ落る様な事があつたらば。舌が腐て落るぞよと。仰せられてあります。いくら向ふを見渡しまして。諸佛の御舌が一枚も落てありません。然れば我々が極樂參りも。決して間違ひは御座いせん。申しましたら。友人も成程左様で御座るか。斯る廣大の御謂れとも知らず。今迄疑ひ迷ふた事の淺間しやと。誤りはて。難有い信者となられたとある。サ一云何です。いよく往生一定御助け治定と。疑が晴れられたか。他力廣大の信心が戴かれたか。獨りくの胸の中を。くらべて歸らるゝのが。今日參詣の所詮と申すもの。

二 眞俗  
領解文百席談上卷終



019243-001-5

特18-730

領解文百席談

小野島 行薰/著

上

M31.1

ABF-2840



204  
2  
217

